

訓民正音の文字要素の配列と伸縮

吉池孝一

1. はじめに

ハングルは単音を表す文字要素を左右・上下に綴り合わせて1単位を作りそれを漢字のように縦に書いたわけであるが、このような綴り方が何に範をとったものか問題となる。河野 1955 は「単位文字はこれらの要素文字の結合による。その結合内における要素文字の配列の順序は左或いは上より右或いは下へ向ふ。大體漢字の構造と同じである。」という¹。たしかに要素が表音であるか表意であるかを問わなければハングルの構造は漢字に類似している。ハングルのこのような表音要素の配列という点につき、吉池 2009 で「漢語の方言字にも2つの漢字を表音的に用いた合体字はある。また、かつて仏典の陀羅尼を漢字音訳した際、複数の漢字を表音的に用いた合体字が利用されたこともあった。漢字漢語の世界でもこのような例はあるが、これによっても、文字を左右上下に綴り合わせるというハングルの発想には至りそうもない。やはり、ハングルの場合、他の文字組織の影響を考えてよいのであろう」と述べたことがある。この点につき、19世紀の中頃より現在に至るまで契丹小字の影響を考える説が提出されている²。文字要素の配列の仕方について、すでに幾つかの依拠説があるが、近年中村 2008 より興味深い漢字依拠説が出されたので次節以降においてこのことについて述べ、次いで初期ハングルの文字要素配列の基本的な枠組みとその展開ということにつき私見を述べる。

2. 文字要素の蛇行配列

中村 2008 によると、表音文字の多くは直線的(linear)に読み進むという性質を有しているが、そうではない表音文字も少なからず存在するという。そのような文字として契丹小字やハングルをあげる。いま、同論文にみえるハングルの例を紹介すると次のようである。

「読んだ本」を意味する「읽은 책 ('irg-'yn caig)」の要素の配列。

'irg	'yn	caig
①②	⑤	⑧⑨
③④	⑥	⑩
	⑦	

この例について中村 2008 に述べるところを引用すると次のようである。

・「全体を現在一般的な左から右への横書きとして見れば、②から③への部分は僅かではあるが逆方向に戻る形になる。これは本来縦書きであったものを横書きにしたために生じた現象であるが、表音文字の配列としては異例と言える。本来の縦書きとして見た場合、各々の要素は蛇行しながら上から下へと進む。その際、行は右から左へ進むにもかかわらず、表音要素の単位では左から右へ進む部分が随所に含まれている。表音文字としては最も若い文字とも言えるハングルにおいて、このような非合理的な配列がいかんして採用さ

¹ 河野 1955 の 366 頁参照。

² 古くは Alexander Wylie. 1859 に契丹小字説がある。もっとも契丹小字を女真文字と誤解する。

れたかについての詳細は不明である。」(1頁)

・「冒頭に言及したハングルの奇妙な配列も、漢字の影響を考慮すれば納得できよう。かつて西田龍雄氏はハングルの文字配列には契丹小字の影響があると唱えたが、むしろ双方共に漢字の影響を受けたと考えるべきではなかろうか。」(4頁)

以上を要するに、縦書きで、①→②、③←②と下に読み進むという配列すなわち蛇行配列の特徴は、契丹小字やハングルに共通したもので、いずれも漢字の「左→右→下」という偏旁の配列を参考にしたためであるという。中村 2008 は文字要素の構成法を俯瞰し、漢字と契丹小字とハングルに共に文字要素の蛇行配列が見られると指摘したわけである。契丹小字およびハングルの蛇行配列が漢字の影響であるとする論には賛成であるが、初期ハングル資料に散見されるやや風変わりな文字要素配列法について、多少説明が必要となろう。以下この点について述べる。

3. 初期ハングルの文字要素配列法について

『訓民正音(解例本)』「合字解」には「合用並書」として興味深い語例がある³。例えば、“隻(ひとつ)”はbjag、“隙”はbsgym、“酉時”はdergs bsdai とある。訓民正音(ハングル)における文字要素の配列を丸付き数字でしめすと次のようである。なお、ai は一要素分の位置を占めるものと見なしておく。ローマ字転写は河野 1979 の方式によった。



bjag	bsgym	dergs	bsdai
①②③	①②③	①	①②③④
④	④	②	
	⑤	③④⑤	

このような二重子音および三重子音を予想させる文字の綴り方については⁴、漢字の構成法のみから説明するのは困難のように見える。そこで吉池 2010 においてチベット文字を参照した可能性に言及したが⁵、現在では前言を翻し、チベット文字を持ち出すまでもなく、中

³ 『訓民正音(解例本)』は姜信沆 1993 による。

⁴ 文字によって暗示された当時の語音が如何なるものであったかということは問わない。

⁵ サイト古代文字資料館「文字と言葉を知る」コーナー中の“漢字関連文字を知る”(2010. 2. 16 付け)で「西藏(チベット)文字の影響を考えてもよいのではないかと述べたことがある。その趣旨は以下の通りである。東アジアの文字を見渡してみると、「合字解」の語例と類似した縦横への音節要素の拡張はチベット文字に見られる。いま寺本 1922 の挙例を示すと次のようである。bsgribs(有覆、障り)という文字要素は次の配列となって1音節を構成する。これは最も複雑な綴り字の例である。なお数字は、bsgribsの左端のbを①として順に番号を振り、右端のsを⑦としたもの。③は基字のgである。

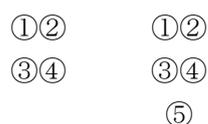
⑤
②
①③⑥⑦
④

村 2008 にあるように漢字の構造によったとすることができると考えている。

思うに、借用漢語音を含め朝鮮語の音節を表記するため、漢字の構造を参照して次のような音節の枠組みが先ず決定されたのであろう⁶。縦の拡張は三層までというのは大原則であったとおもわれる。C1 は初声(子音)、V は中声(母音)、C2 は終声(子音)。今は中声である母音の拡張は措く。

I	II	III	IV
C1V	C1V	C1	C1
C2		V	V
		C2	

この枠組みの最大の特徴は母音の右側に子音を配さないということにあり、そのことは先の「合字解」の複子音を持つ音節の表記でも守られている。そして、二重子音や三重子音がある場合は、音節を表記する基本の枠組みに手を付けることなく、そのまま子音を横に拡張した。下に挙げた契丹小字のように、縦長に音節を拡張することも不可能ではなかったはずであるが、そのようにしなかったのは、要素を配列する枠組みを変えず、漢字に似せた正方形で一音節を組み立てたためである。



いま音節の枠組みによって「合字解」の例を見るならば次のようなことであろう。bjag は I の枠組みにより音節初頭の子音を横に拡張し、bsgym は III により音節初頭の子音を横に拡張し、dergs も III により音節末の子音を横に拡張し、bsdai は II により音節初頭の子音を横に拡張した。ハングルは縦に書かれるから、横に拡張された音節は見栄えのよいものではない。そこで横に拡張した部分の文字要素を小字としてバランスをとったのである。bjag、bsgym、dergs の g を見ると次第に文字のサイズは小さくなっていく。また dergs の d に比べて bsdai の d は小さく縦長となっている。このように文字要素の大小、長短を自在に変えて正方形を担保しようとしたところも漢字の影響である。表音文字に見られる表音要素の自在の伸縮は、漢字の影響とはいえ、文字の類型という点からみるならば興味深い現象といえよう。

4. おわりに

チベット文字の場合、基字と呼ばれるものを中心として縦横に音節要素が拡張されるわけであり、この点はハングルと大いに異なる。しかしながら、チベット文字では縦はほぼ4層まで横は4つまで要素の拡張がなされるわけであり、その外形は先に「合字解」でみたハングルの語例に似ている。このような外形の類似をみると、ハングルは、漢字漢文の影響を受けつつも、チベット文字の配列なども参照した部分があるのではないかと考えてくるのである。チベット文字の1音節内の文字要素は左から右へ横書きされ同時に縦方向にも要素を重ねるわけであるが、これに範をとってハングルの文字要素を配して1音節に纏め、それを縦に配列していくならば、蛇行配列とならざるを得ないであろう。そうであるならば、ハングルの蛇行配列は、チベット文字に範をとったために生じたと言えなくもない。もしもチベット文字に範をとったならば、「合字解」にみえるようなやや風変わりな要素配列の語が出てきてもおかしくはないであろう。

⁶ 『訓民正音(解例本)』「合字解」に「初中終三聲。合而成字。初聲或在中聲之上。或在中聲之左。……。終聲在初中之下。……」(初声(文字)は或は中声(文字)の上側に書き、或は中声(文字)の左側に書く。……。終声(文字)は初・中声(文字)の下側に書く。)とある。訳は姜信沆 1993 による。なお、数年後の『東国正韻』では漢字音は I と III によることとなり、II と IV は朝鮮語専用の枠組みとなった。

訓民正音(ハングル)の文字要素を左から右に拡張することについては、『訓民正音(解例本)』「合字解」に「其合用並書。自左而右。初中終聲皆同。」(その合用並書は左の方から右の方に書き、初声・中声・終声もすべて同じである)⁷とある。このような一音節内の文字の拡張につき、かつて吉池 2010 においてチベット文字を参照した可能性に言及したが、現在ではチベット文字を持ち出すまでもなく、中村 2008 にあるように漢字の構造によったとすることができると考えている。それは先に述べたように、まず漢字の構造を参考にして I II III IV という音節の基本的な枠組みが作られ、その枠組みを変えずに二重子音や三重子音を表記するとなると、子音文字の部分をそのまま横に拡張せざるをえないからである。その結果として、「合字解」の「合用並書」に見られるような、漢字の構造とは似ても似つかない文字要素の配列となって現れた。その際、文字要素の大小長短を自在に伸縮させて漢字に似せた正方形を担保したのである。

〈参考文献(発行年順)〉

Alexander Wylie. 1859. "On an Ancient Inscription in the Neu-chih language," *JRASVZ*, 1859, pp. 137-153.

寺本婉雅 1922. 『西藏語文法』内外出版株式会社。

河野六郎 1955. 「朝鮮語」, 『世界言語概説 下巻』研究社辞書部, 357-439 頁。

河野六郎 1979. 「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」, 『河野六郎著作集 第 1 巻』平凡社, 96-97 頁。

姜信沆 1993. 『ハングルの成立と歴史』大修館書店。

中村雅之 2008. 「表音文字の配列」, 『KOTONOHA』第 72 号, 1-4 頁。

吉池孝一 2009. 「東アジアの漢字関連文字」, 『現代中国への道案内Ⅱ』白帝社, 85-110 頁。

吉池孝一 2010. 「漢字関連文字を知る」, サイト古代文字資料館「文字と言葉を知る」中の 2010. 2. 16 付け記述。 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/>

⁷ 訳は姜信沆 1993 による。